

北海道遺産「北海幹線用水路」を活かした地域づくりフォーラム

石狩泥炭地でロマンの追及

北海幹線用水路沿いの防風林をつなぎ、世界一長い植物園の実現を

赤平市から南幌町まで延長約80km、空知平野の農地を潤すために設けられ、北海道の食糧生産を支える「北海幹線用水路」。

より多くの人に北海道遺産の一つに選定された北海幹線用水路の役割を知ってもらい、地域づくりに有効活用し、さらに存在意義をアピールして行きたいという思いから、4月24日(土)に南幌町「ふるさと物産館ビューロー」3階でフォーラムが開催された。

町内外より参加者は約70名、来賓の三好富士夫南幌町長からは「更なる町の発展に寄与してほしい」というエールを、舟山廣治北海道文化財保護協会会長からは「北海道の発展を目指す道とともに歩み、実践していることに敬意を表明」との激励をいただいた。

基調講演は、北海道遺産協議会会長の辻井達一氏。「みずとみちをつなぐ その2 地域遺産と水環境を活かした地域づくり」と題して、欧州の例をもとに南幌町の進むべき方向性、改善すべきところなど多くの示唆と明確なアドバイスをいただいた。

引き続き行われた「パネルディスカッション水とみどりの環境で地域を豊かにする試み～北海幹線用水路フットパスの魅力と可能性」では、専修大学教授・小林昭裕氏、エコネットワーク代表・小川巖氏、北海道土地改良区理事長・眞野弘氏、南幌町観光協会会長・伊藤勝實氏という多彩なパネリストによって、それぞれの立場と各地での実践経験から、地域の連携や人のつながりを大事にすることなど、北海幹線用水路の「活性化の道」に向けての議論が行われた。

会場との質疑では町民の方々からの熱気のこもった意見もあり、来賓の舟山氏の「成果は一朝にしてならず、連携を元にねばり強い活動を」という更なる発展を強く要望するまとめとともに、フォーラムの幕が閉じられた。



北海幹線用水路。赤平から南幌町まで約80kmにおよぶ日本一長い農業専用の用水路。1924年に着工、4年と4カ月で完成した。いくつもの川を渡るため水路橋や逆サイフンの難工事を克服した。美瑛市には調整池、岩見沢市など市街地では親水公園が整備されている。2004年、将来に引き継ぐ「北海道遺産」に選定された。(写真提供: 北海道土地改良区)

基調講演

みずとみちをつなぐ その2

地域遺産と水環境を活かした地域づくり



辻井 達一 氏 北海道遺産協議会会長
1931年東京生まれ。59年北大大学院を終えて農学部付属植物園で助教授、園長。この間、パタゴニア、アラスカ、ネパール、ヒマラヤ、カナダなどへ。湿原植物を研究テーマとする。88年農林生態学研究室教授。95年に退官し北星学園大学教授。97年から北海道環境財団理事長。国際湿地保全連合理事、日本シャーロックホームズ协会会员。

南ドイツのバイエルン地方は、夏は気温が低く、冬は雪が降る泥炭地であり、同じ泥炭地である南幌町とよく似ている。ここでの活動は参考になるだろう。170年前に立てた棒くいに看板、それが地表だった。それが今では排水と乾燥によって2m以上も沈下した。フットパスコースに立てる看板の横に強化プラスチック製のくいを立て、20年サイクルで目盛りを入れることをお勧めする。既に釧路ではチタンで実践されており、良い歴史資料になるだろう。また、昔の写真や用具をビューローの一角に陳列すると「ビジターセンター」になるのではないか。欧州で同じ泥炭地を持つ地方は自然と歴史的建造物を上手に活かしている。修道院や大学の施設はホテルにし、動物園も広大な敷地に自然のままの形で運営、自然教育を基本にしている。

ミュンヘン北アルトビュールは30年前に農業用ダムができ、耕作地が減った。そこで行政（地方整備局）の肝入りで20軒の民宿を作った。乗馬、ヨット、ボート、釣りや蔵書、料理などタイプの違うものもリピーターが多いという。気が利いているのが、接客のレッスンを施し、外部資本は厳禁している点だ。



オランダは歴史遺産をイベント化している。オープンモニュメントデイズ、主題を決めて面白おかしく開催し、観光にも一役かっている。水にちなんだものなら、運河や橋、井戸などがある。石段なら短い、長いを競い合う。自薦他薦は問わない。しかし、普段から探しておく必要があるだろう。

北海幹線用水路は日本で一番長いものだ。いくつもの切り口で活用できそうだ。この用水路に沿って耕地防風林があるはず、それらをつなげて「世界で一番長い植物園」はできないものか。一番大きい植物園は300haもあるが、長いものは幅30m、長さ300mがせいぜいだ。広大なところは疲れるし、迷子にもなる。しかし、その点長いところはじっくりと観賞できる。戻りは路線のバスなどに頼る、飛び地の植物園もまた面白くてよい。次の機会に、とキープしておくことも可能であり、楽しみが続く。

全国的にメジャーでない「幌向」だが、野草に「ホロムイ」が付くものが七つもある。泥炭地研究の拠点が「幌向駅」の近くだったことが理由だ。幌向湿原はもうないので、それらの野草の自生は望めないが、美唄の研究所に種があるはず。それによって、忘れられた野草の復活と「植物園」の実現を望む。

先人たちの残した財産や資源をどのように残し、そしてどのように利用していくべきか。他にもあらゆるテーマをリストアップしていくとよいだろう。

パネルディスカッション

水とみどりの環境で地域を豊かにする試み

～北海幹線用水路フットパスの魅力と可能性～



小林 昭裕 氏 専修大学教授
富山県出身。北海道大学院環境科学研究科修了。1983年専修大学北海道短大講師となり、現在は同大みどりの総合科学科教授。日本造園学会北海道支部長、北海道自然環境保全審議会副会長を務め、読売新聞に連載を持つ。

実際にコースを自分の足で歩き、ガイドの話を聞くことによって、フットパス参加者の意識は確実に変化している。そこに歴史遺産や都会にはない「農村風景」を感じるからだ。町外に向けた「公園」を作ったり、違和感のない周りの雰囲気にもマッチするイベントを作ること、町外からの足がより一層増えることになるだろう。

砂川市では社会科の副読本に「北海幹線用水路」が記載されている。しかし、残念なことに他の関連市町ではそうしたことは見られない。北海道の穀倉地帯の基盤となった文化を、遺産を、もっと広くにわたりアピールできないものか。

市街地では「公園化」が進んでいる。用水路の上を可能な限り「花畑」にするという手もある。人が歩けるように整備し、それらをつなげれば、今まで背を向けていた人たちも興味や関心を持つかもしれない。初めは運河、そして農業や駅通、人を引き付けることを念頭に活動することで、ビジネスチャンスなども生まれるだろう。

眞野 弘 氏 北海土地改良区理事長
北海道・岩見沢市生まれ。酪農学園機農高校卒業。北海土地改良事業団体連合会理事を経て、2007年4月会長理事に就任。北海道農・水・環境保全向上対策協議会、北海道国営土地改良事業促進協議会会長などを務める。



いま、北海土地改良区は「みどりネット」といっている。水は生き物の生存に欠くことのできないもの

で、水白書では1人1日平均300ℓを使用。また、1tの米を作るには5,000tもの水が必要になる。したがって、農業こそ、自然エネルギー利用の優等生といえる。

赤平から南幌への勾配は低いので、フットパスには最適といえる環境だ。農業基本法に「土だけでなく、人の心を耕す」とあるが、今後社会貢献につながるソフト事業も考えられる。事業仕分けなど取り巻く情勢は厳しいが、可能な限り協力したい。



小川 巖 氏 エコネットワーク代表
松前町生まれ。1969年信州大学農学部林学科卒業。「エコ・ネットワーク」の代表で、北海道自然環境分野の第一人者。札幌学院大学にて生物、同実験等を担任。ほかに北海学園大学、札幌大学、酪農学園大学等で非常勤講師を務める。

長大な北海幹線用水路の、普段気付かない発見や地域の特徴を説明する「語り」があれば、きっとモノになる。上富良野町のロングトレイでは、行き来のない隣町との人間関係のつながりも生まれている。南幌町も同じく、もっと隣町や他の地域との連携を取っていかねばならない。

北海幹線用水路をフットパスでつなぎ、フットパスで人や土地、物を結ぶ。楽しく無理なくやるのが大事だ。とりあえず、美唄までの道を作るところから始めてみてはどうかと思う。

伊藤 勝實 氏 南幌町観光協会会長
南幌町生まれ。1988年に鮭店「鮭半」を設立。町おこしグループ燦陽会の初代会長。2000年4月から南幌町観光協会会長。07年4月食品衛生協会岩見沢地区副会長。



南幌町の農家の二男として生まれ育ち、昔から北海幹線用水路には世話になっていた。資料では今はなき「鶴沼」まで、線路をまたぎ、川の下をも通した偉業だ。新夕張川を含めて、それらを観光にどうつなげるかが問題だ。

コンクリートで埋めたところを花壇にすることなども、一つの観光になり得る。また、三重湖の周辺に森づくりを計画するのもよい。水の流れを復活させ、昔見た自然の姿をもう一度再生したい。

辻井 北海道遺産になっているのだから、フットパスで「影」のものに陽を当てる仕掛けが必要だ。

本州では桜並木で人を集めているところが多く、見習うべきだ。「ミニパブ」「茶屋」などの設置や、田園風景を上から見たパネルの展示、また逆サイフォンや水路橋の下など、舞台裏を見せるイベントも面白いだろう。

歴史の説明も、初めは大工事から始まったのだから、全てのポイントごとに説明する表示板の設置は不可欠になる。こうしたものは、それだけで「観光」につながるだろう。地域は工夫、やり方次第で豊かになっていくものだ。

会場質疑

会場 使われていない町有地を利用して、春から秋を通して野花が見られる空間を作れないだろうか。都市の人たちはそうしたものを求めているはず。

辻井 その場合、特別の植物を持ってくるのではなく、野花を自然に増やす手段を考えた方がよい。泥炭地に合う植物は多いので、そういった面から考えていくとよいだろう。

会場 南幌町は世界でも珍しい泥炭地を持つ、それなのに町外から来る人に対する配慮が欠けている。主要施設のマップさえない。フットパスマップに記載してもらうことなどはできないのだろうか。

辻井 町全体のスポットをわかりやすく紹介する地図は、今後も絶対に必要になってくる。そういったものは早急に作るべきだ。

会場 80kmある北海幹線用水路、さまざまな工法を使ったとのことだが、一般の人が見てわかるような看板がほしい。そういったものがあればまた見方も変わると思うので、ぜひ設置してほしい。

眞野 財政的に厳しいが、公的機関の協力も得て実現



に努力していきたい。

舟山 北海道文化財保護協会としてのお願いがある。幌向駅通は保存状態が極めてよい。隣は改装して資料館にするなど、あらゆる連携で粘り強い活動をお願いしたい。

*

今回のフォーラムへの参加によって、「北海幹線用水路」に関する今までの意識が変わった人は少ないことと思う。全てのプログラムを終え、会場との交流を行ったことにより、「活性化への道」が夢や理想から実現へと近づき着実に歩みを進めているというのが実感できた。

改善すべきところはまだまだたくさんある。理想を語るだけに留まらず、その実現に向けてできる限りの手を尽くすという前向きな姿勢や努力が、個人でなく関連する活動の全体で共有されることが重要なことだろう。そして、それらが本当に現実のものとなれば、地域にとっての波及効果は計り知れないものがある。

全体の意識の向上に向けて、そして再興への道標とするべく、今後も意見交流を行い、活発に取り組んで行くことによって、目指す「まちづくり」は遠くない未来には現実となるだろう。今フォーラムが、その実現への着実な一歩となることを願っている。

(特定非営利活動法人ふらっと南幌事務局 金澤咲也香)



環境をテーマにしたバルーンアートオブジェ「カワセミと地球」
自然に優しい天然ゴムのバルーンが使用されている